

日時：平成23年1月14日（金曜日） 15時～17時

場所：農林水産政策研究所セミナー室

シリーズ第1回「食料需給セミナー：インドの食料需給状況」

京都大学東南アジア研究所 教授
藤田 幸一氏

講演要旨

1. インド農業の概要

インドは、1991年の経済自由化後、90年代半ば以降、高度経済成長を実現しましたが、その背景として、80年代の農業セクターの高成長に伴う農村貧困の減少が上げられます。経済に占める農業のシェアは低下傾向にあり、近年国内GDPの18%程度となっています。また一般の経済成長率と比較して、第一次産業の経済成長率は低く、農工間格差が拡大しています。ただし、依然として労働力人口の約5割を吸収しており重要なセクターです。

土地利用の面では、近年農地面積はほぼ横ばいですが、作付集約度（耕地利用率：2005年で136%）が上昇し、のべ作付面積が拡大しています。昔は、インド農業は、「モンスーンとの賭け」と言われていましたが、灌漑率も43%程度（2005年）まで上昇してきました。裏返せば、作付面積の半分以上が天水に依存しており、インドの農業を支える基盤に不安定性を有します。なお、灌漑率の向上は、ほぼ地下水の電気モーターでの汲み上げによります。

灌漑率は品目ごとに異なり、小麦はほぼ100%、米はようやく6割、とうもろこしは約2割、雑穀はほぼ天水です。なお、東経80度線が、降水量1000mmの分水嶺で、東が稲作、西が小麦、雑穀作がメインです。

2. 食料需要構造とその変化

インドの食生活の変化は把握しづらい面がありますが、10年に1度、家計調査が実施されており、州別の1人当たり消費量の統計があります。これによれば、都市部の小麦消費量が多い、東の稲作地帯では小麦の消費が増加している、西の小麦作地帯では米の消費はほぼないという特徴があります。インドでは、雑穀（ジョワール（たかきび）、とうじんびえ、しこくびえ等）も多く消費され、独立直後は、小麦の消費量よりも多いくらいでした。インドでは、貧しいから雑穀と言うよりも、健康に良いからと、むしろ好んで食されています。

FAOのFood Balance Sheetで、他国と比較すると、
① 穀物消費量が少なく、1人当たり消費量が減少傾向にある

- ② 宗教的理由等により、肉類消費量が少ない
- ③ ミルク消費量が多く、かつ増加傾向にある
- ④ 砂糖消費量が多く（甘いミルクティやお菓子）、世界最大の消費国
- ⑤ 特にとうもろこしなど、飼料用穀物の需要が増加し、それに応じて国内生産も増加という特徴があります。

3. 食料生産動向

米については、世界第3位の輸出国となっていますが、2000年以降あまり伸びていません。小麦に比べて米の消費が伸び悩み、余りつつあります。

小麦については、需要がまだ伸びており、増産傾向にあります。豊凶変動により、輸出したり、輸入したり、需給は不安定で、雑穀については、ほぼ自給状態です。

畜産物については、ミルクや鶏卵は、需要の伸びに応じて生産が拡大しています。肉類は、食習慣等を反映して、州別の格差が大きいです。

穀物の在庫と貿易の関係は密接で豊作が続く在庫が積み上がった時には、在庫処理のため安く輸出市場に出したり、設定された適正水準に押さえようと生産を減らしたところ、2年連続の不作で緊急輸入に追い込まれたり、特に小麦の在庫変動に激しく振り回されています。

なお、米の輸出先は、質は高くないが安いという特性を活かし、バングラデシュとアフリカが主となっています。

インドでは、農産物を国家が買い上げて売り渡すシステムをとっており、政府は各品目の最低買い上げ価格を播種前に提示しています。消費者への売り渡し価格は別途決めており、州によっては、補助金を投入し、さらに安い価格で売り渡すなど、大衆迎合的な安売り競争もみられます。

4. インド食料需給の最近の動向

これまで米や小麦の需給調整に苦しみ、とりわけ2006-07年に、公的配給制度を維持するために、折しも国際価格が高騰している中、550万トンの小麦の緊急輸入に追い込まれました。その後、政府は小麦の買い上げ価格を大幅に引き上げ、2008-09年度の小麦買い上げ漁が2,268万トンに急増し、直近では米と小麦あわせて3,500万トン程度の十分な在庫を保持しています。

インドの農業政策は、最低価格制度のほかは、化学肥料補助金、灌漑施設の建設・維持管理、（地下水を汲み上げるモーター用の）電気代補助金、貧困層への食料支援となっています。

（文責：株田文博）